

グローバリゼーションと政治

安永 勲

- 一、はじめに
- 二、グローバリゼーションと三つの立場
- 三、グローバリゼーションの中の政治
- 四、グローバル・ガバナンスの検討
- 五、おわりに

一、はじめに

『グローバリゼーションとグローバル・ガバナンス』(*Globalization and Global Governance*, 1999)の著者V・ケーブルによれば、「グローバリゼーション」の語は四〇年以上前に『エコノミスト』誌に初めて登場したとされる。そしてその語は、今や私たちが最も頻繁に耳にする言葉の一つとなり、今日

の経済・政治・社会などの研究分析において中心的な概念ともなっている。昨秋、本研究所で「ドイツから見たアジアの宗教・法・政治」と題するシンポジウムが開催されたが、それは、旧来の比較研究という視点に立つのみならず多分に現在進行中とされるグローバリゼーションを意識したものであったと思われる。

しかし私たちは、それについての正確な理解をもつに到ってはいないと思われる。本稿は、まさにグローバリゼーションとはなにかという初歩的疑問から出発している。運よく私の手許にはこの疑問を解いてくれるようなタイトルをもつD・ヘルドが編集する著作、*a globalizing world?* があった。ここではその二つの章を要約する形で、その疑問をいくらかでも解き明かそうと考える。

そこで本稿では、まず、グローバリゼーションとはなにかが問われ、それについての対照的な三つの立場が概観される。次いで、変化を蒙っているとされる政治の現状が考察され、最後に政治の現状に相応しいガバナンスが問われる。

二、グローバリゼーションと三つの立場

(一) グローバリゼーションとは

まずはじめに、グローバリゼーションの意味を考察しておくことは後の考察にとって有益である。『政治学事典』（弘文堂 平成一二年）によれば、それは、「経済、政治、文化などさまざまな分野で、空間、時間が圧縮され、世界が一体化していくこと、またそのような意識が形成されること」とある。

またJ・ヒルシュは、技術的、政治的、イデオロギー的／文化的、経済的という四つの観点からそれを説明する。そこにおいては、世界の遠く隔たった部分を直接的かつ迅速に結びつけることを可能にした最近の技術とりわけ情報処理／伝達技術の革命的な進歩および転換と地球は一つの村であるという発想との関連が指摘され、また冷戦の終結およびそれに伴う世界の東西二大陣営への分裂の終焉と国連がいずれは世界政府の役割を担うのではないかとの期待感とが関連づけられる。そして、たとえば自由民主主義の原理や人権思想が一般的に承認されあるいは資本主義的な消費スタイルが世界的なものとなったように、ある特定の価値が普遍的となり、また商品・貨幣・サービス・資本などの流通の自由化、生産の国際化、多国籍企業の発展に促されて、全世界的に資本主義的な市場が張り巡らされ、資本主義が世界で支配的かつ普遍的になるさまが言及されている^①。

以上から推察して、「グローバリゼーション」は、経済、政治、社会などさまざまな分野で世界が統合化に向かっていく状況を表現する用語と解されるであろうが、その重要な概念として、A・コ克蘭とK・ペインは四つのものを挙げる。社会関係の拡大・フローの強化・相互浸透の増大・グローバルなインフラがそれである。

まず、社会関係の拡大 (stretched social relations) とは、文化的、経済的そして政治的な関係が国民国家の境界線を跨って拡がり、その結果、世界のあるところで起こった出来事や決定が世界の他のところにも大きな影響を与える状況を意味する。グローバリゼーションとリージョナリゼーションの違いは、一方が大陸横断的 (transcontinental)、地域間的 (interregional) に起るのに対して、他方は「地理的に隣接する国家」の間に生じるという点にある^②。

次に、フローの強化 (intensification of flows) とは、国民国家を越えた相互作用や相関性のフローやネットワークのそれである。世界を網羅するコミュニケーション・ネットワークは、その見えざる力によって領域的な空間とは全く別個の共有される社会的空間を作り出し、物理的な距離感とはや世界の裏側で起きた重大事件に対して人々の感覚を鈍くさせるようには作用しない。⁽³⁾

第三に、相互浸透の増大 (increasing interpenetration) とは、そのような状況の中で明白に隔たった文化や社会が直接的に対面させられ、あらゆる分野で相互に影響を及ぼされるような状況の増加を意味する。その中でローカルとグローバルの関係地図は変化を余儀なくされる。ある論者の次の言及はそのような状況の説明として非常に示唆に富んでいる。「グローバリゼーションは、領土の実際の物理的な占領を伴わない旧来の植民地権力関係の再構である。但し現在ロンドンやニューヨークのようなグローバルな都市はかつて物理的にないし経済的にその国を西洋によって植民地化されていた人々によって植民地化されている。」⁽⁴⁾

最後に、グローバルなインフラ (global infrastructure) とは、グローバル化されたネットワークが稼働するにあたって必要とされる基本的な公式ないし非公式の装置である。ある人々にとって、重要とされるのは諸会社、諸国、人々、労働と資本が従わなければならないルールをもっているグローバルな(自由)市場の存在であり、また他の者にとって経済的そして政治的なガバナンスの大陸横断的でグローバルな制度の出現であるが、いずれの場合にあっても、それを支えるのは情報／コミュニケーション・テクノロジーであり、そこには国民国家の主権に対する挑戦が看取できる。⁽⁵⁾

(二) 二つの立場

以上にグローバリゼーションを概観したが、それに対する立場はさまざまである。コ克蘭らによれば、その重要なものとして三つの立場があるとされる。すなわちグローバリスト、トラディショナリストおよびトランスフォーメーションナリストの立場がそれである。

第一のグローバリストは、グローバリゼーションを現実的で具体的な現象と捉える。そして彼らが論じるところによれば、現在の世界の状況は次のように把握される。すなわち社会関係の配列には重大な転換があり、社会過程はいまや地球規模で動いている。グローバリゼーションの衝撃は世界のいたるところで感じられ、増大するグローバルな相関性は国境をあまり重要なものとしなくなる。国家的な文化、経済および政治はグローバルなネットワークの中に組み入れられる。これらは国家的な違い、自律および主権を縮小し、より同質的なグローバルな構造と経済を作り出す⁶⁾。

コ克蘭らは、グローバリストを楽観的／積極的グローバリストと悲観的グローバリストに分けられるが、前者は、グローバリゼーションによってもたらされる恩恵を強調し、その結果を歓迎すべき変化とみなす。彼らにとって、グローバリゼーションは、生活の質を改善し、生活水準を上昇させ、人々を一体化させる力もつと解されるからである。そしてまた、彼らは、世界中の国民の間で文化の共有と理解が促進され、グローバルなコミュニケーションを通じてすべての人が世界市民となることすら視野に入れる。グローバルな環境汚染の危険を認める一方で、彼らは、私たちが高水準に維持されている消費を減少させるために責任を果たすならば、事態を改善できると言い、また汚染のレベルを削減するような新しい技術の開発を信じる。一方、悲観的なグローバリストは、変化のためのあらゆる圧力に抵抗で

き、世界に独自のアジェンダを押しつけることができる経済的、政治的に重要な勢力の支配を力説する。彼らは、国家のアイデンティティーおよび主権の先細りを見る一方で、グローバリゼーションの不均等な結果を指摘する。⁽⁷⁾

逆に、トラディショナルリストは、グローバリゼーションに懐疑的な態度をとり、グローバリストの諸見解に反対を表明する。彼らは、世界をめぐる貿易や貨幣のグローバルなフローの増大を以前の時代に国家間で起きた経済的および社会的な相互関係と異なるところのないものとして受けとめ、グローバリゼーションを神話と断じ、それを特有の新しい現象と解することの行き過ぎを指摘する。そして彼らは、財や文化の交換は以前の時代にまで遡り、既に一九世紀において開かれた貿易や自由主義的な経済関係は世界規模の規範であったと論じるのである。彼らにとって、眼前で起きているそのような現象はこれまでの世界貿易関係の継続であり進歩に過ぎず、経済的、社会的活動の大半は空間的スケールにおいてグローバルというよりもむしろ依然として本質的にリージョナルであるとみられる。

そしてトラディショナルリストは、グローバリスト以上に国民国家に行動の余地を認める。彼らによると、国家は、自律的な組織として独自の経済的、政治的なプライオリティーを決定し、第二次大戦以後の福祉国家を擁護するための重要な余地をいまだに保持しているとみなされる。彼らは、グローバリゼーションをグローバリストによる国家の矮小化を納税や十分な賃金の支払いを渡る大企業によるイデオロギー的な改革運動以上のものではないと断じて、グローバルな企業の開発優先の姿勢に対する諸集団の抵抗を支持し、それによって生み出されるグローバルな不平等に挑戦しようと奮闘する。⁽⁸⁾

トランスフォーメーションリストは、前二者の中間に位置するかも知れない。彼らは、トラディショ

ナリスト同様、国民国家は依然として軍事的、経済的そして政治的に強い力を保持していると考えられる。しかしその一方で、彼らは、トラディショナルリストのようにグローバリゼーションの観念を無下に却下せず、それがもつ具体的な衝撃や結果を過小評価することを無謀とみる。グローバリゼーション下におけるさまざまな関係は形の上では重要な転換は認められないが、その性格は特有であると解されるからである。国民国家の自律はさまざまな形のトランスナショナルな力によって制限されるとみられる⁽⁹⁾。

トランスフォーメーションナリストは、グローバリストが本質的に誤っているということを言っているのではなく、むしろグローバリゼーションは不可避ないし固定された終着点として理解されるべきではないと言っているのである。グローバリゼーションは、彼らにとって、それを通じて権力が大部分は間接的に行使されるところの相関的な関係の複雑なセットとして解されるからである。彼らは、そこにおいての問題の処理は民主的な責任のための新しい進歩的な構造とガバナンスのグローバルなシステムに委ねられるべきだと考える。このシステムの中で、グローバルな制度は民主化され強化される一方で、国民国家は政策にとって領域的に特殊で正当で責任ある枠組みとして重要な役割を保持する。彼らは、グローバル化傾向によって示される構造的な文脈と国家的、地方的、そしてその他の機関によってなされるイニシアティブとの間の相互作用の重要性を強調するのである⁽¹⁰⁾。

三、グローバルゼーションの中の政治

(一) 政治の現状とウエストファールリア体制

A・マックグレーは、イギリスのグラスゴーで起こった一三才の少年の痛ましい死亡事件―ヘロイン中毒死としてはイギリスにおける最年少記録―およびイギリス政府の麻薬対策を引き合いに出しながら、日々の出来事がいかにグローバル化しているか、従来の政治のあり方の限界と政治のグローバル化の進展について論じている。

このような悲惨な事件の再発防止に取り組むイギリス政府は、その種の原因がその法的、政治的な管轄権を超えているという現実に向き合っている。洗練されたトランスナショナルな組織を通じて麻薬取引に対する効果的な対策を立てるために、イギリス政府は国際的に調整された行為を必要としている。このことは、相互に関連性をもつ世界において国内的ないし地方的なものと対外的ないし国際的なものを区別することは意味をなさなくなっていることを物語っている。それは、ある国の公共政策のほとんどの側面は、他の国々の政府、会社、消費者、市民グループ、地方的コミュニティの行為や決定の結果と無縁ではないということを意味する。そして国境を跨って拡がる問題の累積は、そのような現実的な政策についてばかりでなく、何が国民国家の限界か、経済的社会的な生活の組織がシステムティックに領域的な管轄権を超えようとしているとき、国家の政府はどれほど効果的でいられるかというもつとも基本的な問題をも提出する^①。

マックグレーは、このような問題を考察するにあたって、ウェストファリア体制に目を向ける。現代の世界地図に目を通せば明白のように、地球は一九〇ないしそれ以上の排他的なコミュニティすなわち国民国家に分割されているが、彼によれば、その地図は次のような仮説を具体化したものと理解される。

- ①領域性（人類は国民国家と呼ばれる別々の領域的な政治的なコミュニティを組織しているということ）、
- ②主権性（その領域内部で国家ないし政府はその人民に対して至高かつ排他的な権威と人民からの忠誠を主張するということ）、
- ③自律性（国家は、固定された境界線が外部世界から国内的な領分を切り離すが故に、固定された境界線の中の政治的、社会的および経済的な活動の自律的なコンテナとかわれるということ）、
- ④首位性（国家は、領域、その中の経済的、人的および天然資源へのアクセスを制御するがゆえに、グローバルな政治的眺望を支配するということ）、
- ⑤無政府状態（国家は自分で自分を守る―それは自助的世界であるということであり、それ故に国家の主たる機能の一つはその市民の安全と福利を確保し、外的な干渉から彼らを守るということである）⁽¹²⁾がそれである。

マックグレーは、その最も深いルーツは一六四八年のウェストファリア講和条約にあるとし、ウェストファリア体制を構成する抽象的原理、規範および実践は近代の政治生活の主たる特徴をなし、日々の国家活動の中で再生産されて今日に至っているとみる。先の麻薬の問題を例にとれば、麻薬の不法取引防止のための措置を命じ実行するための権威をもつグローバルな組織が存在しない現状では、それに対する効果的な政策は諸国政府と、それらの自発的な相互協力に依存する。これは、ウェストファリア体制の理念が依然として現代のグローバルな出来事についてのガバナンスに影響を与え続けていることを意味する。そしてそれは国内的な出来事と国際的な出来事という承認された二分法を補強する。一方は

政治支配の中心的制度としての政府の存在によって、他は後者はそのようなものの明白な欠如によって規定される。従って、ウェストファリア体制は国境線と完全に重なり合う政治的空間の概念を具体化したものとみなされる⁽¹³⁾。

(二) 国家の国際化と政治のトランスナショナル化

ところで、マックグレーは、EUからグローバルな資金洗浄に至る、リージョナルおよびグローバルな制度とネットワークの中に現在のイギリスは深く編み込まれていると言う。それは、トランスナショナルな制度とネットワークが、人間活動のあらゆる領域の内部や、さらにはインターネットが爆発的増大を見せるにつれて、仮想的現実の領域においても発達し、財、資本、知識、理念、武器、犯罪、汚染物質、ファクションや微生物までもが国境を越えている状況が起きているとみられるからである。そこにおいて、国民国家は、「分散したコンテナとしての国家」から「フローの空間」すなわちグローバルなフローやネットワークが浸透し国境を侵す空間も同然となり、また現代の社会的、経済的な活動の多くがリージョナルおよびグローバルな規模で組織され、本質的に異なる地域のコミュニティの運命との緊密性も増す傾向にある。かくして、グローバルな政治が出現することになる。

それに伴って、国家の国際化も数段前進した。一九九八年のバーミンガム・サミットで、G8の政府の首脳はそれに対する国家のプログラムと政策を調整するための行動計画に同意し、続いて国連事務総長も不法薬物への戦争を布告した。その遂行の責任機関は、前者にあってはリヨン・グループであり、後者にあっては国連薬物統制計画(UNDCP)であるが、これら二つの機関の背後には、その実を挙

げるために、インターポールや種々の地域機関を通じての各国の麻薬対策機関と警察の日常的な協力が
あり、そこには各国政府の麻薬防止に対する努力の国際化が看て取れる。もちろんそのようなことは麻
薬防止にとどまらず、あらゆる領域に及んでいる。同様に政府間組織（IGOs）の数は一九〇七年の
三七から一九九九年の約三〇〇にまで爆発的に増加し、その活動も各国政府の役所に似たようなもの
になっている。それらに加えて首脳による会談や協議が頻繁に行われるようになっていたが、これも国家
の国際化の進展を物語る一つの証左である。¹⁴

さらに、マックグレーは、グローバリゼーションが国家の国際化と結びつくとき、政治のトランスナ
ショナル化も容易となり促進されると指摘する。数百に上る地球を網羅するNGOの活動がそれを証明
する。それらは、さまざまな分野で活動し、定期的に国連が協賛する会議にも出席する。人々が普遍的
な利益、信念、大義ないし職業的な目的の追求のために領土ないし大陸を越えて組織され動員される時
代において、NGOは、インターネットの助けを借りて、国境横断的な共通の利益を動員し組織するこ
とによって、EUやUNDCPのような地域的そしてグローバルな団体の政策ばかりか独自の国家政府
の政策すら形成しようとしている。その数は、二〇世紀はじめには一〇〇足らずであったが、現在は五
〇〇〇を越えると推計される。これは、社会を横切って資源、情報および権力を調整するに当たって、
トランスナショナルな政治的な結びつきや組織がますますの重要性をもっていることを意味する。¹⁵

（三）現在の政治活動のトランスナショナル化の特徴

トラディショナルリストは、既に一九世紀のグローバルな帝国の時代にホワイトホールからの命令を通

してメトロポリタン国家の国際化と奴隷廃止のようなグローバルなキャンペーンに見られるような政治活動のトランスナショナル化を看取したが、現在進行中の事態には以前と比してどれほどの独自性があるのであるか。マックグレーは、次の五点を挙げる。すなわち①政治的相互作用の政府間的、トランスナショナルなネットワークの存在、②国家の上位、下位ならびに同列の新しい権威の中心の増大、いまだ脆弱ではあるが、進化したグローバルな政体の出現、③このグローバルな政体と並ぶ発展途上のトランスナショナルな市民社会の存在、④グローバル・ガバナンスおよびトランスナショナルな市民社会の存在と結びつく新しい形の多国籍的、トランスナショナルおよびグローバルな政治の存在がそれである。補足すれば、①のネットワークは、国連やグリーンピースのような公式組織、世界の強大国の中央銀行の間の定期的な協議、トランスナショナルな麻薬カルテルのような非公式組織によって代表される。②の新しい権威の中心の増大とは、たとえばイギリス政府が影響を蒙る諸団体を指す。③のグローバルな政体とは、UNDCPやEUなど、多様なグローバルそして地域的な団体であり、グローバル（ないし地域的）・ガバナンスの発生期のシステムを構成するものと解される。そしてそれらは、政府間的およびトランスナショナルな機関、各国政府の間の政治的調整のプロセスに携わり、グローバルないしトランスナショナルな規則の作成・履行、国境横断的な問題の管理を通して同意された目標ないし共通の目的のために働くとされる。④の市民社会の形成には、NGO、トランスナショナルな組織、市民グループ、サポート・ネットワークが重要な役割を果たし、その形成は異なる国家、地域の人々の間にある共通利益意識、グローバル・コミュニケーションの速度と容易さによって拍車がかけられるとされる。また「市民外交」の急増は未発達なトランスナショナルな市民社会の構成要素とされる。最近において、

国連からEUにいたるリージョナル・ガバナンスおよびグローバル・ガバナンスの主要諸制度は、リオの国連地球サミット（一九九二）において政府の公式の代表者が数の上で環境団体やその他の関係団体の代表者に劣ったように、公式非公式の会議にトランスナショナルな市民社会の「大使」の参加と出席を促進している。ここで言う市民社会とは、市民および私的利害関係者が相互利益を増進させ、各政府ならびにグローバル・ガバナンスの公式の制度にその活動に責任をもたせるために国境横断的に協働する政治的領域を意味する。⑤の新しい形の政治とは、グローバル・ガバナンスやトランスナショナルな市民社会の存在と関連するもので、政治的空間がもはや国境と一致せず、各国政府が国家自体ないしその市民の運命を左右する単独の主人ではなくなる政治を意味する。そこでは各政府とその市民は、更なる拡がりを見せるネットワーク、およびリージョナル・ガバナンスやグローバル・ガバナンスの層の中に埋め込まれる。⁽¹⁶⁾

四、グローバル・ガバナンスの検討

（一）グローバル ガバナンスの構造

ガバナンスとは一般に「ものごとを管理・運営していくための諸ルールの体系」（『政治学事典』、弘文堂、平成一二年）とされる。従って、グローバル・ガバナンスとは、政治活動のトランスナショナル化に伴って生じる出来事を管理・運営していくための諸ルールの体系と言えよう。マックグレーによれば、グローバル・ガバナンスの現存のシステムは、ほとんどのグローバルな活動の領域およびほとんど

の国家がその管轄の外側に存しえないほどに、冷戦終結後、極めて普遍的な領域を獲得したとされる。第二次大戦の終結直後に確立した協力の制度と枠組みを基礎としながら、グローバル・ガバナンスのインフラは、単一の権威の中心を欠いた複雑な多層をなすシステムへと発展してきたとされる。それは、国家、政府組織から多国籍企業にわたる多様な機関に依存するが故に、ポリアーキー的ないし多元的と記述される。マックグレーは、それを超国家的 (suprastate layer)、国家的 (national layer)、下位国家的 (substate layer) およびトランスナショナル (transnational layer) という四層からなる「レイヤーケーキ」状のものと理解する⁽¹⁷⁾。

超国家層は、各国政府の間の正式な協定によって生じられた政府間組織、国際的団体からなる。それらは、ある種の自律的な明確な法人格をもち、その構成メンバーは万国を包括するほどに最近では拡大している。それらの組織の大半は、国際民間航空機関が航空運輸に関心をもつように、グローバルな活動の特殊な部門に対して機能的な責任を持つ。また二〇世紀末の二〇年間には諸大陸には地域的な集団と組織も見られ、そのようなものにはEUのように構成国の統合を深めていくものもあれば、とてもベースが遅くあるいは限定的な地域統合にとどまるものもある。増殖を続ける超国家的活動に戦略的指針を与えるために、G8やEU評議会のような各国政府のリーダーによる会談その他も頻繁に開かれるようになった。超国家的ガバナンスの影響力は、EUの権限が拡大したときに国内および地方レベルの公共政策にヨーロッパないし地域的基準が適用されることになったイギリス同様に、いたるところで経験されている⁽¹⁸⁾。

下位国家層は地方自治体を想起すればよい。外国資本の誘致がグローバルな次元で激化したとき、そ

の活動は活発化した。それは、主要なグローバルないし地域的なフォーラムへの参加を通しての使節団の設立から国際自治体連合のような団体の設立までいろいろな形をとり、下位国家当局はそのようなメカニズムを通じて中央政府を経由せずに自前で重要政策を提案することもできる。それらは、その内部で一般的な問題や共有される問題を処理するために共同で提案をなすような枠組みを供給する^⑬。

トランスナショナル層には、市民、コミュニティ、私的利害関係者、NGO、トランスナショナルな運動、多国籍企業などが含まれる。グローバルな結社革命 (associational revolution) はグローバル・コミュニケーション革命に付随して起きた。NGOやトランスナショナルな運動は、発生期のトランスナショナルな市民社会の関心や利益を表現するものであり、その権力と影響力は集合的な目標を追求するに当たって国境を横切って人々や資源を組織するその能力から生じる。しかしそれらは非常に多岐にわたり、それらが一般に国家や多国籍企業より経済的政治的資源の面で劣っているということを除けば、一般化するのは困難である。それらがグローバル・ガバナンスにおいて発言権を獲得する仕方はさまざまである。それに対して国際的な市民社会で極めて目につく有力なものは多国籍企業である。それは、経済のグローバル・ガバナンスにおいて特権的な地位を得ているばかりか、ほとんどの問題は経済的利害ないし打算と切り離されない^⑭ので、その影響力は経済的領域を越えて拡大している。

このようにグローバル・ガバナンスは四層からなり、その各層はそれぞれグローバル・ガバナンスに影響を与えるように作用している。

(二) グローバル ガバナンスの三つの構想

上に見たように、現今のグローバル・ガバナンスは四層からなるが、そこにおいて、何が支配の主要な機関であり、誰が、誰の利益のために、どのような手段を用いて、どのような目的のために支配するのであるか。このことに関して、マックグレーは、先に挙げられたグローバリゼーションの三つの立場、トラディショナルリスト、グローバリスト、トランスフォーメーションリストの見解を対照させ、それを簡明に図に表している。

トラディショナルリストは、いわばウェストファリア体制の理念に基づいて、国民国家に基礎を置くグローバル・ガバナンスを構想すると見ることができる。冷戦以後に唯一の超大国となったアメリカは、進んでその資源や注意を世界の運営に向けることはなかったが、それにも拘わらずグローバル・ガバナンスのあらゆる側面に拒否権を発動できる立場にあり、他の国々に対してルールを課したりガバナンスの制度を直接に統御するというよりも、国連のような国際的な団体の決定を拒否し無視する能力によってグローバルな出来事の管理に大きな影響力を行使してきた。彼らは、グローバル・ガバナンスの構造、パターン、結果を形成するにあたって、その時代の支配的な権力が決定的な意味をもつと力説するが、グローバリゼーションはアメリカナイゼーションとする考え方はそこに由来するであろう。⁽²²⁾

その一方で、グローバリストは、資本主義がグローバル化したとき、アメリカのような強大な国家でさえグローバルな市場の規範に飲み込まれるとして、新しい形の資本主義秩序のグローバルな企業およびその合同の覇権を承認する一方で、政治家、官僚、企業、その他さまざまな団体のトランスナショナルなエリート⁽²³⁾のネットワークが重要性をもつとみる。

また他方で、トランスフォーメーションナリストは、前二者の決定論を斥け、変わりつつある状況に相應しい柔軟性の重要性を強調すると共に、人民権力および専門家の役割を強調する。彼らによれば、政治活動のグローバリゼーションは、グローバルな資本の支配に対する抵抗を動員し組織するにあたって、世界の人民のためにグローバルな市場や制度を機能させようと努める新しい種類の「ネットワーク政治」の出現と同時に起るとされ、「ストップ・ザ・MAI」⁽²⁴⁾運動に対する抵抗の動員と組織化は「下からのガバナンス」の顕著な成功例として評価された。また彼らにとって、グローバリゼーションは、一九九七年の東南アジア金融危機がもたらしたグローバルな金融崩壊の脅威において明白なように、システムティック・リスクを生み出し、グローバルな「リスク社会」を発生させるものであり、そのようなリクス社会の統治を担当するのは専門知識と経験をもつ専門家こそ適格者であるとされた。⁽²⁵⁾

五、おわりに

既に見たように、「グローバリゼーション」はさまざまな分野で世界が統合化に向かっている状況を表現する。しかし私たちは、一方でいまだに人種的、宗教的あるいはその他さまざまなことを原因として紛争や戦争が頻発し、他方では政治的および経済的なリージョナリゼーションが進行し、多文化主義が声高に擁護され、「文明の衝突」の主張が一定の支持を受けるなど、グローバリゼーションの進展を素直には認めがたい状況も存在している。

本稿は、冒頭で述べたように、グローバリゼーションとはなにかという初步的なところから出発した。

ヘルドが編集するその著は、このような疑問をある程度満たしてくれるものではあったが、そのような厳しい現実の前で多くの釈然としないものが残っているのも事実である。そして早くも言うべきか、『グローバリゼーションの終焉』(H・ジェームズ著、二〇〇一年)と題する著作が出版されている。ここでは、グローバリゼーション崩壊の原因として三点が挙げられている。システム自体が内包する欠陥、グローバリゼーションに対する社会的・政治的な反動、最後に世界統合の進展によって生じる心理的・制度的変化への人間やその人間が作り出す制度の不適合がそれである。

本稿では、グローバリゼーションやグローバル・ガバナンスのあり方について、三つの立場を概観した。それらは、いま進行中とされるグローバリゼーションがどのような変化であり、その変化にいかに対応すべきかについて見解を異にするものであったが、それは、極論すれば、偶然的な変化への対処的な方策の議論のようにも見える。ジェームズがいうごとき事態を回避するためには、変化自体を制御するための方策についての議論も必要な時期なのではないだろうか。

註

- (1) J・ヒルシュ／古賀暹訳「グローバリゼーションとはなにか」、「グローバリゼーションを読む」、情況出版、二〇〇〇年、二四―二五頁。
- (2) Cochrane, A. & Pain, K. "A globalizing society?", Held, D. (ed), *a globalizing world? culture, economics, politics*, Routledge, London & New York, 2000, pp. 15-16.
- (3) *ibid.*, p. 16.

- (4) *ibid.*
- (5) *ibid.*, p. 17.
- (6) *ibid.*, p. 22.
- (7) *ibid.*
- (8) *ibid.*, p. 23.
- (9) *ibid.*
- (10) *ibid.*, pp. 23-24.
- (11) McGrew, A. "Power shift : from national government to global governance?", Held (ed), *cit.*, p. 131.
- (12) *ibid.*, pp. 132-133.
- (13) *ibid.*, pp. 133-134.
- (14) *ibid.*, pp. 135-138.
- (15) *ibid.*, pp. 138-139.
- (16) *ibid.*, pp. 140-142.
- (17) *ibid.*, pp. 142-143.
- (18) *ibid.*, pp. 143-146.
- (19) *ibid.*, p. 146.
- (20) *ibid.*, pp. 146-148.
- (21) *ibid.*, p. 160.

グローバル・ガバナンスの理論

目 的	手 段	利 益	支 配 者	主 要 な 機 関	
覇権的な利益を誘導するグローバルな秩序の維持	同意と強制	国家のおよび地理戦略上の利益	階層…盟主としてのアメリカ	支配的な国家	トラディショナルリスト (覇権的なガバナンス)
グローバルな秩序の安定と再生産	構造的な権力…国民国家ができることを制限するグローバルな市場	グローバルな資本	グローバルな法人…トランスフォーメーションな企業文明	グローバルな企業と金融資本	グローバルリスト (グローバル資本の支配)
効率的で、責任があり、効率的なガバナンス、上からのグローバルゼーションへの反対と抵抗	知識の適用、手続、専門的な審議 国境横断的な動員、トランスナショナルな連合の確立	部門的および集団的な人民の利益 追求および地球的利益	ポリアーキー…多様な社会勢力 および利益	知識のコミュニティ、NGOと 社会運動	トランスフォーメーションリスト (テクノクラートの支配、下からのガバナンス)

(22) *ibid.*, pp. 152-153.(23) *ibid.*, pp. 153.

(24) 多角的投資協定 (The Multilateral Agreement of Investment) に反対するグローバルなキャンペーンのこと。

(25) *ibid.*, p. 154.